トピックス

特定外来生物クビアカツヤカミキリの被害分布と防除：対策におけるちょっとしたコツ

国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所 加賀谷（かがや） 悦子（えつこ）

はじめに

クビアカツヤカミキリ *Aromia bungii*（図-1）の日本への侵入が確認されたのは2011年であり（安達，2017），今年でちょうど発生が10年目を迎える。本種幼虫はバラ科樹木の樹皮下を食害し，被害木は時には枯死に至る。被害木はサクラ（ソメイヨシノ）*Cerasus*×*yedoensis* 'Somei-yoshino' の本数が最も多いが，果樹ではモモ *Prunus persica* の被害が深刻である。ウメ *Prunus mume* の被害木も各地で散見される。2018年1月に特定外来生物に指定され，各地で駆除活動が進められている。成虫は6～7月に出現する。体長約2～4 cmの大型のカミキリムシで全体は艶のある黒色を示し，前胸背板のみ赤色である。

侵入当初から，被害地では被害を封じ込めるための活動が開始されたが，外来種には施用可能な農薬が少なく，被害木を伐採し，人の手で成虫や幼虫を捕殺することから本種防除活動は始まった。その後，研究の進展や農薬の登録に伴い，今では多くの手法を防除に用いることができるようになった。今なお，特効薬的な「これさえしておけば大丈夫」という手法は開発されていないが，被害地ごとの状況に対応した防除法を実践することにより，本種の密度を低下させることに成功した場所も多く，それらの手法を各地で実践することで今後被害の封じ込めが進むことが期待される。本稿ではまず，全国におけるクビアカツヤカミキリの被害分布と発生拡大の経緯を示す。被害がいつどこで始まり，どのような経過をたどってきたのかを知ることは，今後の対策を各地で考える際に不可欠である。続いて，防除法の概要を整理し，防除を成功に導くためのちょっとした「コツ」を紹介する。この小文が被害地で本種防除を実践する人，樹木管理を指導・実施する人に参考になることを願う。

本クビアカツヤカミキリの研究は，国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 生物系特定産業技術研究支援センター「イノベーション創出強化研究推進事業」の支援を受けて課題名「サクラ・モモ・ウメ等バラ科樹木を加害する外来種クビアカツヤカミキリの防除法（30023C）」において行っている。

図-1 クビアカツヤカミキリ成虫

I クビアカツヤカミキリの被害分布と発生経緯

クビアカツヤカミキリが最初に国内で採集されたのは，2011年埼玉県深谷市であり（安達，2017），被害発生は2012年に愛知県海部地方で初めて確認された（愛知県，2013）。現在では，樹木被害が認められるのが群馬県，栃木県，埼玉県，茨城県，東京都，愛知県，三重県，大阪府，奈良県，和歌山県，徳島県の11都府県に及んでいる（図-2）。都道府県単位での被害地数が大きく増えたのは，2015年に4都府県で新たに既存の被害地からの遠隔地で発見されたときと，昨年，2019年に近隣の被害地から分布拡大により新たに4県で被害が発見されたときである。2015年以降は遠隔地での被害は発生していないことから，生じてしまった被害を拡げずに封じ込めていくことが，本種対策の現在の重要な課題となっている。

Red Necked Longhorn Beetle *Aromia bungii* Damaged Areas in Japan and Rosaceae Tree Protection Methods : Tips for Controlling.
By Etsuko SHODA-KAGAYA
（キーワード：外来種，穿孔性害虫，バラ科樹木）

植物防疫